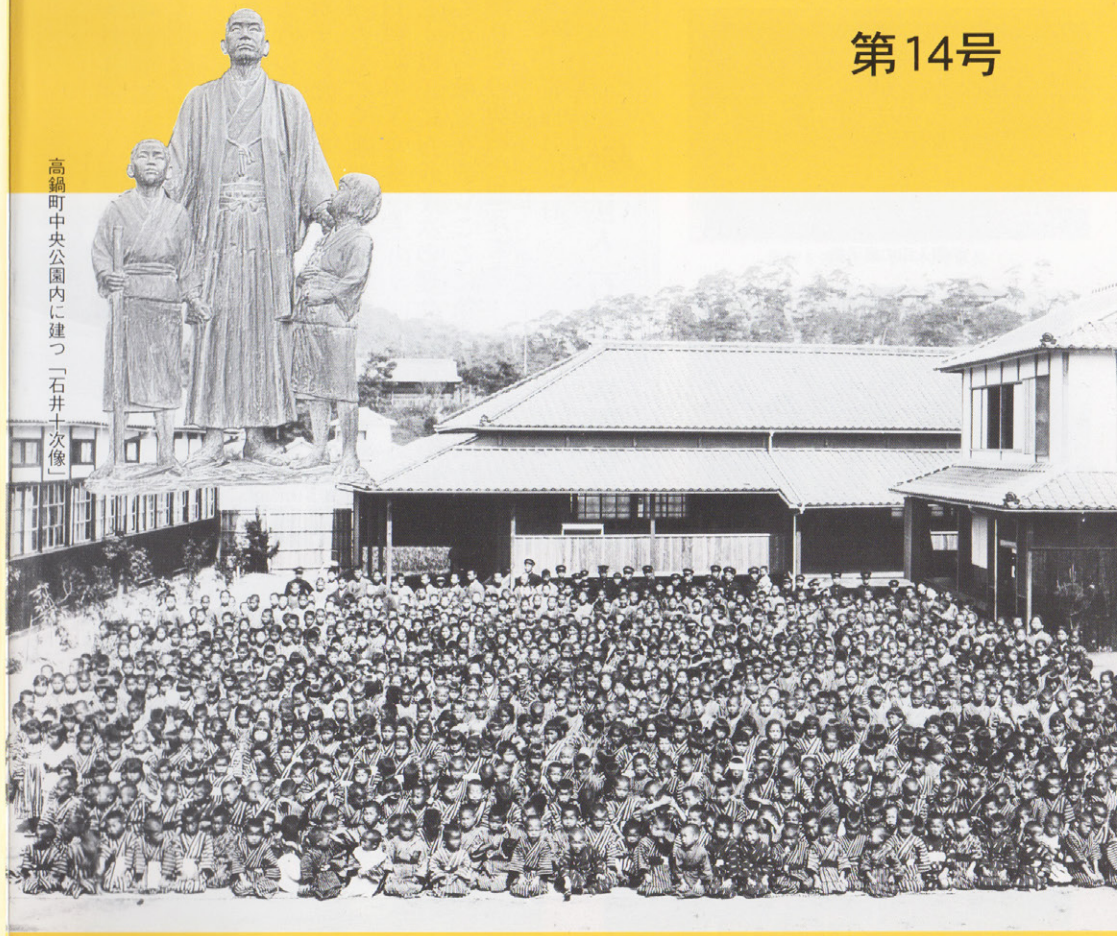
石井十次顕彰会だより

第14号



高鍋町中央公園内に建つ「石井十次像」

1200人余りの孤児で一杯の岡山孤児院（明治40年・西暦1907年）

財団法人　石井十次顕彰会

第15回石井十次顕彰のつどい

２月５日㈯中央公民館ホールにて開催されました。
記念講演で県立図書館資料室筆耕委託員をされている甲斐　亮典先生が『先賢に学ぶ』と題して石井十次の功績について講演をしていただきました。その後高鍋西小学校５・６年生児童による『最初の孤児』の児童劇と資料発表を行い、町民のみなさんの期待に応えるすばらしい顕彰のつどいができました。次回も町民の皆さんの方の多数の出会を期待いたします。

多額のご寄付をいただき　ありがとうございました。
厚くお礼申し上げます。

寄付者報告第14号

● 16. 12. 16～17. 3 .31

篤志寄付

高鍋町　今村稜子
宮崎市　印刷センタークロダ
高鍋町　舘野キミ
高鍋町　ＳＳグループ

忌明寄付

京都府　川越俊一
高鍋町　古屋絢子

寄付者報告第14号

● 17. 4 . 1 ～17. 12.10現在

篤志寄付

高鍋町　坂田師通
高鍋町　舘野キミ
高鍋町　立正佼成会　岩崎　隆一
高鍋町　長尾　輝
高鍋町　小夏　美由紀
高鍋町　小森正隆
高鍋町　税田格十
高鍋町　藤間亀舟　社中
高鍋町　皆川雅之
高鍋町　株式会社　増田工務店
高鍋町　有限会社コンビニー今村

忌明寄付

高鍋町　後藤千満子
高鍋町　稲田ミツ子
高鍋町　清野秋實

あとがき

国内外ともに暗い話題の多い年だったようにあります。台風14号での被害を受けられた方々には心よりお見舞い申し上げます。
青少年の幾つかの事件を見ても、心の教育の大切さを声を大にして叫びたくなるほど痛ましく思えてなりません。石井十次の思いやりの精神をもっともっと広めたいものです。『石井十次顕彰会だより』第14号をお届けいたします、どうぞご覧ください。

財団法人　石井十次顕彰会
〒884-0006
宮崎県児湯郡高鍋町大字上江1138番地
TEL 0983－23－4312

第14回石井十次賞

希望の灯学園
戸村リセ子理事長

学園入口の掲示板

学園の運営を支える職員の皆さん

石井十次賞

社会福祉法人ブレル会
児童養護施設　希望の灯学園　様

孤児救済を自らの天職と定め五十年の生涯をささげた児童社会福祉事業の先駆者石井十次の人類愛と社会奉仕の崇高な精神を永遠に継承し愛の心思いやりの心を全国に広めるために石井十次賞を制定しました
貴学園は明治十三年フランス人Aブレル神父が「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのはわたしにしてくれたことなのである」
　という聖書の教えにみちびかれ「ちいさい子ら」への愛のために鯛の浦修道院シスターの協力と奉仕によって養育事業を創設された　戦前戦後の苦難の時期を乗り越え昭和四十六年に『希望の灯学園』とその名を変えて今日まで百二十五年の長きにわたり児童養護施設として三千名をこえる児童を入所させ一人ひとりの心の支えとなってそれぞれの自立を支援し育成してこられました　また時代に即した新しい児童支援事業などにも取り組まれ現代社会の福祉の向上に貢献されてきました
このことは正に石井十次の理念に沿ったものであり心から敬意を表しここに第十四回石井十次賞を贈りその功績を讃えます

平成十七年四月十一日

財団法人　石井十次顕彰会

税田理事長より賞状を戸村リセ子学園理事長へ

謝辞を述べられる戸村理事長

生誕記念式典で挨拶をされる小澤浩一町長

平成四年の第一回石井十次賞（北海道家庭学校）以来、第十四回（児童養護施設　希望の灯学園）となり、平成十七年四月十一日に、その贈呈式を行いました。
併せて、当日会場で発表された小中高校生の文章をお届けします。

修道院への入り口近くに立つマリア像

マタイ書の言葉と創立者A・ブレル神父

学園生活と別れ自立の道へ

園内にあるつぼみ幼稚園の園児たち

希望の灯学園の正面玄関

A・ブレル神父の墓前に花束を捧げる園児たち

中学校４校の生徒に英文の石井十次小伝の贈呈

九州地区の福祉施設野球大会で優勝した園児ナイン

「第14回石井十次賞」受賞者紹介

『第14回石井十次賞』候補者募集を、平成16年12月末を期限として全国都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会及び個人推薦人にお願いしました。その候補者のうちから、平成17年２月23日、東京都において、選考委員会を開催し、審査の結果下記の施設に決定しました。

社会福祉法人ブレル会　児童養護施設『希望の灯学園』

理事長　戸　村　リセ子

住　所　長崎県南松浦郡新上五島町鯛ノ浦303-6

TEL　０９５９－４２－０２０４

【受賞者紹介】

フランス人Aブレル神父は、聖書（マタイ書25章31～46）の『わたしの兄弟なる最小さいひとびとの心身の必要や、困難なやみに対して価値ある奉仕をなす』（いと小さき者の一人にしたのは私にしたのである）このような聖書の中にあるキリストの教えのもとにブレル神父はシスターたちの協力を得て1880年（明治13年８月10日）養育事業を創設された。これが鯛之浦養育院の起源であり、現在の『希望の灯学園』の前身をなすものである。創設以来125年になる古い歴史を有し三千名をこえる児童を入所させている。

創立年月日	明治13年８月10日	種　別	養護施設
設立認可	昭和23年１月１日	児童定員	35名
経　営	社会福祉法人　ブレル会	職員数	18名

沿革（主なもの）

明治13年８月10日	Aブレル神父　創設
明治18年４月16日	Aブレル神父永眠　ペルー師その偉業を継ぐ
明治34年４月	谷中セヨ院長就任
明治45年	育児専用棟改築
昭和５年12月	谷中カナ院長となる
昭和23年１月１日	児童福祉法による収容施設認可　定員30名
昭和30年１月１日	定員40名となる
昭和35年12月１日	定員50名となる
昭和42年８月10日	社会法人ブレル会設立
昭和46年４月１日	『鯛之浦養育院』の名称変更『希望の灯学園』と改称
昭和48年２月	谷中セイ子同法人理事長就任
昭和55年３月15日	創立100周年記念式典挙行　つぼみ幼児園改築落成
昭和57年４月１日	戸村リセ子園長就任
昭和63年４月１日	谷中ミチ子園長就任
平成６年２月28日	図書室物置改築工事完了（自立訓練ホームナザレト館）
平成６年４月１日	定員35名
平成15年９月29日	ブレル館（子供たちのケア室と談話室）完成
平成16年４月１日	小規模グループケア事業を開始
平成17年３月	ナザレト館増改築工事（グループケア事業の家）

養護施設では乳幼児を除いて、保護者のない児童、虐待されている児童、その他環境上養護を要する児童を入所させ養護することを目的としている。

◇　家庭養育支援事業として次のような事業も行っている。

緊急一時保護事業４　デイケアー（通所養護）事業

ショートステイ（短期入所）事業　父子家庭等児童夜間養護事業（トワイライトステイ）

石井十次先生について

高鍋西小学校　５年　髙　崎　香好美

私は、１年生から４年生までの道徳のじゅ業で、十次先生についていろいろなことを学びました。

１年生のときは、親のいない竹ちゃんのために着物をぬってあげる優しい十次先生のお母さんのことを、２年生のときは、お母さんにおってもらったつむぎの帯となわの帯をとりかえてあげる十次先生のことを、３年生では、じゅん礼に来ていた子どもにおにぎりをあげて助ける十次先生のことを勉強しました。

そして、４年生では、強い決心でこじをすくう仕事を選んだことを学びました。十次先生は、こじをすくう仕事をするか、医者になるか悩んでいました。十次先生のところには高鍋のお父さんから手紙が来ました。その手紙には、こじをすくう仕事より、医者になった方がいいというふうに書いてあったそうです。十次先生は、もっとなやみました。１年半もなやんだそうです。そして、ついに決心しました。「ぼくは、こじをすくう仕事につこう。」と決めました。そうと決めた十次先生は、持っていた医学書を全部焼いたそうです。これは、もう、医者になることは考えない、ぜったいにこじをすくう仕事をするのだという強い決心があったからだと思います。

その後、十次先生は、こじをすくう仕事をやり続け、３千人ものこじをすくったそうです。十次先生は、食べ物やお金に苦労しながらもこじたちを大事に育てました。私がすごいなあと思ったのは、十次先生が、子どもたちに、ただ食べ物や着る物をあたえただけではなく、時間を決めて勉強させたり、印刷や米つきなどの仕事も覚えさせていたりしたことです。しょう来、社会に出たときに生きていく力を子どもたちにつけさせたいという願いからでした。

高鍋西小学校では、毎年「石井十次先生をしのぶ会」という行事を行っています。「十次先生の歌」を手話をしながら歌ったり、劇をしたりします。私たちが、４年生のときは、十次先生の一生で心に残ったことを俳句にして発表しました。そこで私は、十次先生が、子どもたちのしょう来のことまで考えて、世話をされたことを思い、『こじのため　生きる力を　教える十次』という俳句を作りました。

このように、こじのことを深く考え、強い意志で、仕事をされていた十次先生でしたが、50才のとき、ついに病気が重くなってしまいました。十次先生は、100人近くの人を呼び集めて手をにぎりながら、一人一人にお別れの言葉を言われたそうです。私はこのことを知ったとき、十次先生は、最後の最後まで、こじのことを考えている人だったのだなあと思いました。

十次先生は、とても優しい人で、また強い実行力を持った人です。だから、多くの人にしたわれるのだなあと思いました。

西小の正門の近くに「信、愛、和」と書いたひがあります。十次先生の残した言葉です。私は、これは「人を信じる、人を愛する、人となか良くする」を表しているのだと思って毎日見ます。

私も、石井十次先生のような優しくて実行力のある人になりたいです。

石井十次先生について

高鍋町立高鍋西中学校３年　上　野　希　望

私は小学校のころから石井十次先生について学んできました。そして中学生になった今でも十次先生についての勉強は、とても印象に残っています。その中でも特に記憶に残っている話があります。

それは、十次先生が７歳のころ、貧しさのために縄の帯をしめてきて、いじめられている友達を見たのです。十次は、お母さんが丹誠込めて作ってくれた自分の帯をその友達の縄の帯と交換したというのです。

私がこの話を初めて知ったのは、このときの十次先生と同じ７歳のときでした。私はお母さんが作ってくれた大切な帯を交換してしまうなんて、自分にはできないだろうなと思いました。中学生の今でも十次先生のような行動は難しいと思っています。

また、医者を志していた十次先生は、医師になろうとする人は他にもいるという理由で医学書を焼き、医者への道と決別し、孤児救済の道へ進んだ話など、先生にまつわる話はすばらしいものばかりです。

このような逸話に表されているように、十次先生はキリスト教の教えをバックボーンに、困っている人のために働き続きました。たとえば、十次先生自身が孤児院の経営でお金に困っているときでも、身寄りのない孤児をその都度受け入れたり、孤児が何か悪いことをしたときも頭ごなしに叱るのではなく、なぜこんなことをしたのか、熱心に話を聞いてあげたりしました。

今の日本で、十次先生のように他人のために動ける人はどれだけいるでしょうか。今の日本は、十次先生の生きた明治時代よりとても豊かになっています。物や食べ物があふれていて、豊かすぎると言ってもいいのではないでしょうか。

今の時代の生活はずっと豊かになりました。しかし、十次先生の言う「精神の孤児」は昔と比べると多いのではないでしょうか。「精神の孤児」というのは、人をいじめたり、非行に走ってしまう人たちのことです。物質的に豊かになった反面、人と人を結びつける絆が薄れ、自分さえ良ければそれでいいという風潮が蔓延しています。

このような「精神の孤児」に対して、十次先生のように救いの手をさしのべる人が必要だと思います。私も少しでも困っている人の役に立つようなことを迷うことなく行えるようにしたいです。「精神の孤児」に救いの手をさしのべる人が増えれば、犯罪や非行は少しずつ減っていきます。

これからも十次先生の教えを忘れずに、そしてこんなにすばらしい人が郷土にいたことを十次先生を知らない人たちに伝えていきたいと思います。十次先生と同じ高鍋出身ということを誇りに思い、十次先生のようなすばらしい人になれるよう努力していきたいです。

石井十次を現代に問う

高鍋高等学校　３年　甲　斐　紗千子

『鮎は瀬に棲む、鳥ゃ木に止まる、人は情けの下に住む』

これは、石井十次が亡くなる前日に口ずさんだ、都々逸という詩人の詩です。鮎が浅瀬に棲んだり、鳥が木の上に巣を作るということが当然であるように、人が人を思いやることも当然だ、そう述べていると私は思います。

私は小学生のとき初めて、石井十次について知りました。「石井十次の歌」に出てくる歌詞でよく知られているように、友達の縄の帯を自分の絹の帯と交換してあげたことや、孤児救済事業に専念するために医学の道を離れたこと、茶臼原の開拓などは、とても有名な話ですが、知った当初は、すごい人だという感想しか持ちませんでした。しかし、それから中学・高校と十次の事を学ぶにつれてすごいというだけではなく、彼が後世に残したことや、現代社会に与えた影響について、考えるようになっています。

十次が行ったことの中で特に私が注目するのは、感化教育です。「感化」とは、行動や言葉を通して相手に影響を与え、その相手の考え方が変わるよう促すことです。十次は、孤児院の子供たち一人ひとりと密室で対話をすることによって、その子供の間違いを正したり、また、その考え方についてより深く知ろうとしました。

時には一千人を超えた子供たちと、一人ひとりじっくりと話をすることは、非常に精神力を使うことだったに違いありません。しかし、十次が真摯な姿勢を崩さずに対話に臨んだからこそ、子供たちも自分の道をしっかりと見据えることができたのだと思います。

この感化教育は、現代においても重要なものだと思います。近年、学校に自分の居場所が無いと感じる子供たちが多いと、よく耳にします。彼らの多くは、非行に走ったり、または引きこもってしまうことが多いそうです。そのようなことが問題視される現代社会では、感化教育のように、子供たちの心の声を聞くことが最も大切なのではないでしょうか。ただ激しく叱るだけではなく、話し合いを重ねて本人の主張を聞いた上で、まず認め合うことが必要だと思います。

石井十次が後世に与えた影響で最たるものは、やはり社会福祉ではないでしょうか。この社会福祉は、私たちの周りの至る所で活動が行われており、その範囲は、お年寄りや様々な障害を持つ人々への介護から、地震などの災害で助けを必要とする人々への支援、いわゆるボランティアまで、とても幅広いのです。この事は、今の日本、そして世界にもっとも必要なものであると考えます。

今盛んに叫ばれている高齢化は、日本だけでなく世界の問題として注目されており、二〇一四年には日本国民の四人に一人が六十五歳以上の高齢者になると予測されています。介護を必要とする人が増える一方で、社会福祉のあり方も重要視されるでしょう。また、最近ではバリアフリーという考え方があり、年齢、性別、身体条件、出身、国籍などに制約を受けずに、誰もが充実した日常生活を送れるようにしようというものです。

これらは一見、石井十次の考え方とは無関係に見えますが、その源流は同じものだと思います。それは、無差別にお互いを思いあう心です。十次が子供たちのことを愛し、また子供たちも十次を慕っていたように、人と人とが思いあうというのは何においても大切なことに変わりありません。「人」という文字は、人と人とが支えあってできているとよく言われますが、全くその通りです。私も、家族の叱咤、友達の励ましがあって初めて、ここまで成長することができたのだと思います。十次も孤児院を運営していく上で、辛いこともたくさんあったはずです。しかしそれを乗り越えられるほどのパワーを、毎日子供たちからもらっていたからこそ、あのように多くの子供たちを救うことができたのでしょう。

最後になりますが、災害が多発し、心を痛めるような事件が多い今日では、私たちは石井十次から学ぶべきものはとても多いのではないでしょうか。それは一言で語りきれるものではないと、ここにいらっしゃるみなさん全員がそう感じているはずです。

私はこれから自分の人生を決める大切な時期に入っていきます。たとえどのような道に進んだとしても、自分の故郷に石井十次という尊敬すべき人物がいたことを誇りに思い、そしてその想いを心に留めつつ歩んで行こうと思います。

What I thought about Juji Ishii

Takanabe-higashi J.H.S.
3 rd grade Mizuho Enomoto

When he was six or seven years of age, Juji was dressed by his mother in a new kimono with a good belt for the harvest festival. 'Now you look handsome! Why don't you go outside and play?' said his mother. Juji directed his steps toward the shrine, his heart beating with joy. A small boy was whimpering near the gate of the shrine. 'What's wrong, Matsukichi?' Juji asked. But he guessed from the way Matsukichi was dressed humbly in a torn kimono with a rope for a belt that he was being snubbed by his friends. 'Stop crying, Matsukichi, I'll give you my belt.' said Juji taking off his belt for Matsukichi. 'And led Matsukichi over to his friends to join them and play.

In the evening. Juji went home only to be asked by his mother what had become of his belt. Juji told her the truth honestly, though he feared that he might be told off for what he had done. But his mother gave him a gentle smile and said. 'Is that right? Good for you. Matsukichi must have been very happy.' His mother's response inspired Juji to begin his volunteer work.

This is a famous story. What do you think of this story? If you were Juji, How many of you will help Matsukichi like Juji? I hope a lot of people will become a kind person like Juji. Even if you couldn't behave like Juji, I think it's very important for you to have a warm heart to other people, and to help anyone who need help.

Thank you for listening.

来賓の祝辞

石井十次について私が思ったこと

高鍋東中学校３年　榎　本　瑞　穂

六つか七つの頃である。秋祭りがきて、十次は母に新しい着物を着せられ、新しい帯も締めてもらった。

「さ、きれいになったわ。遊んでらっしゃい。」

十次はむねをはずませて天神さまに向かった。鳥居のそばで小さな子がしくしく泣いていた。

「あ、松吉、どうしたんだ？」

松吉が、破れた着物を着て、なわの帯を締めているので、のけ者にされていることが分かった。

「泣くな、松吉、ぼくの帯をやるから。」

十次は自分と松吉の帯をとりかえた。そのあと、松吉を連れて行ってみんなと遊んだ。

夕方、家に帰ると、母にきかれた。

「あら、十次、帯はどうしたの？」

十次は、正直にわけを話した。叱られると思ってびくびくしていた。しかし母は、やさしく笑った。

「そう・・・。それはよかったわね。松吉、喜んだでしょう？」

十次は、自分も、雲のような喜びがわき上がってくるのを感じた。大きくなったら、自分がどういう人になったらいいかを、母に教えてもらったような気がした。

これはとても有名なお話です。みなさんは、この話を聞いて、どう思いますか？もし、みなさんが、十次の立場だったら、十次のように松吉を助けてあげる人は、どのくらいいるでしょうか。私は、十次のように「優しい心」をもてる人が増えてほしいと思います。十次のように大きいことはしなくても、周りに困っている人がいたら助け、思いやりをもって接する、「優しい心」が大切なのではないでしょうか。

フラエンコールなでしこ

The life of Juji Ishii

Takanabe-nishi J.H.S.
3 rd grade Haruka Okumura

Juji Ishii was born in 1865, in Babanoharu, Takanabe Town, in Miyazaki prefecture. Juji was an ambitious boy and wanted to be a naval officer. So he went to a school in Tokyo called Kogyokusha, but a year later, he fell ill and was not able to fulfill his dream.

He returned to his village and decided to work on the barren land with his friends but a typhoon came and destroyed everything. He then changed jobs and worked as a secretary at the Miyazaki Police Office, but even this job did not satisfy him. One day when he was sick, he met a doctor, Dodohei Ogiwara, who encouraged him to become a doctor.

When he was eighteen years old, Juji studied medicine and Christianity at Koushu Medical Institute and went back to his hometown during the summer holidays. In his town, he established a school called Babano-haru-asaban school where young villagers could study. During the day, they would work in the fields and then study together at night. Juji was greatly respected by all the villagers.

One day Juji found a boy and a girl dressed in shabby kimonos at the temple. They looked up at Juji with fear and anxiety on their faces. The instant Juji gave rice-balls to them, these children wolfed them down. That night their mother was also at the temple. She said to Juji with fear-filled eyes, "We are living our lives as beggers with no place to stay nor relatives to rely on. Wherever we go, people throw stones at us and make us go away. Sir, we can't keep on living this way. I implore you to take care of this boy." Juji went home. His heart was full of sympathy. "Shinako, my dear, can't we do something for them?" Juji said to his wife. She answered in a compassionate tone, "Just one boy would not be too much trouble!" They decided to adopt the boy named Sadaichi and bring him up. More and more people heard about this and Juji was asked to look after many children. Later, Juji set up "The Orphan Education Association."

Thanks to Juji, many changes have been made to the Japanese welfare system. Juji's statue can be seen in Takanabe town. The people of Takanabe will never forget Juji's spirit.

石井十次の生涯

高鍋西中学校３年　奥　村　美　香

石井十次は、1865年、宮崎県高鍋町馬場原で生まれました。十次は志を高く持った少年で、海軍士官になりたいと考え、攻玉舎という学校に入りました。しかし１年後、彼は重い病気にかかり、夢を果たすことができませんでした。

十次は、郷里に帰り友人といっしょに荒地の開墾をはじめましたが、台風が襲い、田畑はすべて流されてしまいました。それから仕事を変え、宮崎警察署で書記として働き始めましたが、この仕事でさえ十次を満足させることはできませんでした。そんなある日、十次は病気にかかり、荻原百々平という医者に出会います。彼は十次に医者になるよう励ましてくれました。

18才のとき、十次は甲種医学校で医学とキリスト教を学びました。夏休みになると必ずふるさと高鍋に戻りました。そして村の若者たちのために「馬場原朝晩学校」という学校を設立しました。昼間は田畑に出て働き、夜はみんなで勉強をするのです。十次は村の人々に大変尊敬されました。

ある日、十次は寺にぼろをまとった男の子と女の子を見付けました。二人はおどおどとして不安そうな目で十次を見上げました。十次がおにぎりを差し出すと、二人は奪いとるようにして、あっという間におにぎりを平らげました。その夜、寺に二人の母親もいました。「わたしたちは、家も身寄りもなく物乞いをして生きています。どこへ行っても人から石を投げ付けられて追い払われてしまいます。このままでは生きていけません。どうか男の子だけでもあずかってください。」十次は胸いっぱいに哀れみの情を満たして家に帰りました。「品子、私たちに何かできないだろうか。」十次は妻品子に相談しました。品子は哀れんでこう答えました。「男の子だけならなんとかなりますよ。」二人はその定一という男の子を引きとり、育てることにしました。人々がこのことを聞いて、たくさんの子どもたちが十次に預けられたのでした。そして、のちに十次は「孤児教育会」を設立したのです。

十次のおかげで日本の福祉は大きく変わりました。今日、ここ高鍋の町には十次の銅像が建てられ、町を見守っています。高鍋の人々は十次の精神を忘れることはないでしょう。

第24回　生誕記念式典での献花